

発行日 2011年9月26日
 編集人 横浜市グループホーム連絡会
 横浜市中区本牧満坂10本牧生活の家内
 TEL 045(623)5318 FAX 045(623)5319

昭和51年12月22日第3種郵便物許可
 KSK増刊通巻5132毎月12回2・3・4・5の付く日発行



東日本大震災の教訓

横浜市グループホーム連絡会

会長 室津 滋樹

5月の連休明けに岩手県大船渡市、陸前高田市を訪れる機会があった。まちの中心部が流され壊滅的な被害にあっているこれらのまちの中でグループホーム入居者は被災後どうしているのか、話を聞き、グループホームのあった場所をみせていただいた。

陸前高田市では、6カ所のグループホームすべてが流された。4月開所予定で新築していた7カ所目の建物も流されていた。大船渡市では、2カ所のグループホームが流されていた。

それぞれのまちで、がれきの荒野と化したまちの一面をさして、ここにグループホームがあったとの説明を受けた。それらの場所は、暮らしやすそうなまちの中心地にあった。駅のそばだったり、スーパーがすぐ近くにある場所であったり、入居者のみなさんが生活しやすい場所として選ばれたのであるということはすぐに見て取れた。線路も流された、スーパーの看板だけが残るがれきの山を見ながら、こ

のまちはどのような風景だったのだろうかと思像した。

グループホームがどこにあったかは、運営者がどのような思いをもってグループホームを設置したかに通じるところ。運営する側の都合で作られるグループホームが徐々に増えているのではないかと懸念される状況の中、これらのグループホームは、高台にある入所施設から障害のある人たちが地域に出て、普通の暮らしを営むことを願って取り組みが続けられてきたのだと思う。

テレビドキュメンタリー番組で、陸前高田市の津波に流されたグループホームのことが取り上げられた。流されたグループホームを目の前にして、入居者が「グループホームに帰りたい」と言っていたことが印象的であった。改めて、グループホームは障害のある人たちにとって「家」であることを思った。

今回の震災を機に、改めて「障害のある人たちの暮らしと地域とのつながり」という原点に立ち返ってみる必要があると考える。

現在、被災地ではグループホーム再建の取り組みがすすめられている。「帰るべき家」が再び入居者の生活にもどってくることを願って、また一番暮らしやすい場所にもどつてグループホームをつくった人たちの思いを長期にわたって応援していきたい。

「走れメロス」の日々

宮城県仙台市・社会福祉法人みんなの広場

総括所長 横谷 聡一

2011年3月11日金曜日の午後14時46分、東日本大震災発生。私達のグループホームでは27名の精神に障がいのある方々が市内6カ所のホームで生活していた。震災発生時には日中の障害福祉サービス事業に通所している方々が多く、事業所内ではお互いの安否の確認が出来たのだが、事業所外の方々は発生後すぐ通信手段の一切が通じなくなった。沿岸の仙台市若林区荒浜の企業内就労に取り組み利用者もおり、現地はその後、津波で建物も何もかもなくなつたのだが、発生直後の避難により無事に生還を果たした。

その後、連日連夜の泊まり込みで利用者全員の安否確認やライブラインのサポートの為に巡回を行

い、事業所職員1人1人が「走れメロス」となつて取り組んだ。街全体の機能が崩壊したかの如く、交通機関も停止し、日に日にガソリン・灯油がなくなつていく。救援物資と燃料の確保について行政への要望を行うものの急性期においては「グループホームは施設でなく在宅とみなされる為、必要な食料等は近隣の避難所を利用して下さい」との回答があり、実際に出向くと「いま避難所で受け入れた方で手一杯の為、食料等の提供は出来ない」とのことであつた。

全国からの救援物資が届くようになるまで、水と食料等の生活に必要な物資の確保に奔走することとなつた。市内のグループホーム支援者の体験談をお聞きすると



とと 高橋 歩(たかはし あゆみ)

当法人のホームも全く同様であつたが、支援者が「支援」ということにこだわり過ぎると、かえつて支援の差し支えになることもあつた。例えば食品1人1個限定の行列においても、世話人1人が何度も行列に並ぶ食料調達から、入居者と共にチームになり一緒に並ぶことが出来るようになると、食事が適度な時間にとれるようになつたり、水が止まつたホームでは水が来るのをひたすら待つ状況にあつたが、地域のどこに給水車が来ているのか、どのように給

水を受けるのかといった生きる為の大切な情報を入居者と共に歩き、近隣の方々との挨拶を交わす、こうした地域で生きる日頃のグループホームの基本となる自立の支援に立つた地域生活が非常に大切であり、震災後の入居者の生活基盤の向上が増して行くようになっていったのだが、その場その場の状況により問題や課題も時間と共に大きく変化していく。

震災から1週間後の夜、世話人より「ホームの食料が尽きました。これから2日間は出勤できないので、どうしてもいいでしょう」と申し出があつた。要望している救援物資は届かず、とうにガソリンも底をついた。仙台にはグループホーム連絡会がないので横の連携もままならない。この非常事態の時にグループホーム連絡会があつたらどんな連携がとれるのだろう、そう考えながら近隣スーパーにわざわざ自転車で走り出したが、走れメ

ロスの気持ちもさすがに心が折れそうになる。物資の不足からスーパーの閉店が続く。ネット情報も誤報が多かった。

自転車で長距離を走行中、仙台市に「グループホーム連絡会を作ろう」と震災前に研修に出向いた横浜市グループホーム連絡会の会長、室津さんからほぼ毎日のように電話があった。

その夜、僕はこれから走らねばならない坂を目の前に疲労困憊していたのだが、室津さんより「疲れようだけど、しっかりとしなさいよ!」との声。「大丈夫です、しっかりとしていますから!」とスタミナ不足で答えたが、電話を切った後なぜか室津さんの言葉がリフレインした。室津さんの「疲れるようだけど休みなさい!」じゃなく「疲れるようだけどしっかりとしなさい!」というメッセージが心に響き、目の前が閉店していても全力で走り切る

うと思った。結果、スーパーは開いていた。閉店5分前。店員さんが「本日閉店」の看板を掲げ、最後尾に立ち、「今日のお客さんはここまで!」と言いかける寸前に、僕は最後尾に飛びついた。しかし店内はほとんどの棚が完全に売り切れ、一難去ってまた一難と思いきや、棚に絶賛在庫中の食品を発見した。それは、プリキユアが描かれてある子供用レトルト・カレーである。「よし、2日分、グループホームのみんなが生きられる!」

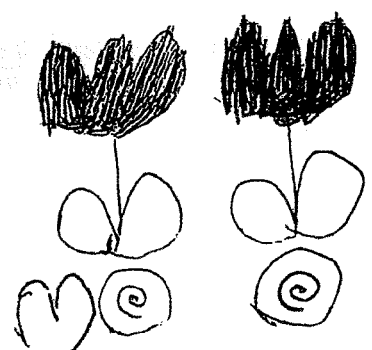
こうした日々を過ごし、どこよりも早く横浜市グループホーム連絡会、横浜市施設職員の皆様より救援物資や情報提供、励ましをいただき、全国各地からの応援が届くようになったことはどれだけ現場の元気につながったか、思いだすだけで胸にこみ上げるものがある。

現在、仙台では「仙台市グループホームケアホーム連絡会」の立ち上げに向け、話し合いや準備が進んでいる。震災中の対応では「走れモロス」になって現場が奮闘することも大切なことだと感じたが、個々の現場の力だけでは限界がある。グループホームケアホーム連絡会で情報を共有し、必要な情報を共有しあえる体制作りが心から大切なのではないかと、いうことを実感すると共に、すでに連絡会のある横浜市の皆様より学んでいるところである。余震が続き、津波の爪痕が残る仙台市ではあるが、復興に立ち向かう中

いと、多くのかけがえのない命と多くの見えない全国の方々の力が震災後の街を応援してくれていることを強く感じる。金子みすゞさんの詩のように、まさに「見えぬけれどもあるんだよ、見えぬものにもあるんだよ」という言葉が身に染み、今に熱中するだけではなく見えぬものを大切に想いたいと

強く感じている。

横浜市を始め、この震災で関わった多くの方々から学んだことは、共に生き、共に支え合う社会の実現の為に、システムがなくても支え合う灯となるのは人々の「心」であるのだが、本心に情報を共有すべき時によいシステムが機能する為には、日頃からの挨拶、地域との交流、様々な方々との横の連携や情報の交換を進めていき、愛するこの国の安心安全な社会基盤について、その土台を作りたいと強く想う日々である。



ビーンズ 和田 祥子(わだ さちこ)

「東日本大震災 被災地から」

避難してきた人たちを支援して

グループホームマンボウ 横堀 真一

神奈川県かながわけんの取り組みで、3月21日、福島県ふくしまけんいわき市いわきから東日本大震災だいしんさいで被災ひさいした知的障害者ちてきしょうがいしゃ33名なが避難ひなんしてきました。そのうち15名なが港南区こうなんぐの県立けんりつひばりが丘おかのが学園がくえん(以下「学園」)で避難生活ひなんせいかつを始めたので、連絡会れんごくかいとして支援しえんに取り組みとくしました。

〈応援する人の輪をつくる〉

避難ひなんしてきたのは社会福祉法人しゃかいふくしほじんいわき福音協会いわけんきんまうかい(以下「ふくいん」)が支援しえんする、グループホームグループホームや独り暮らしひとりぐらしの20〜30代の男女だんじょで、いわき市の職員しやくいんと法人ほうじんの支援員しえんいんが1名同行めいどうりゆうしていました。私たちが初めて訪れた23日夜にちやはちょうど計

画停電かくていでん中で、薄暗うすくらい中でも皆さん賑やかに談笑だんさうしている様子ようす。明るくしているようでも「ちよつとトンションが高すぎるかな」という感じかんじもしました。学園がくえんは元青年寮もとせねんりやうだった1区画くわを生活場所せいかつばしょとして食事提供じきよき、風呂・洗濯機せんたくきも利用りようでき、喫煙所きつえんじょも設けてありました。施設しせつの診療所しんりょうじょも利用可りようか。空いている時間じかんならば体育館たいいくかんなども利用りようできる。避難者ひなんしやは外出がいしゅつも自由じゆうで、さらに支援ポランティアしえんポランティアも自由じゆうに出入りでいりりできるなど、入所施設にゅうじょしせつとしてできるあらゆる配慮はいりよをしてくださっていました。はじめにふくいん、学園がくえんのスタッフと、今どんな支援しえんが必要ひつようかを話し、連絡会れんごくかいとして「当面たうめんは外

出しゅつをお手伝いてつだいしていくこと。その間に関係かんけいを築きずき、ニーズを把握はあくしていくこと」を確認かくにんしました。

とにかく皆さんを孤立こりたさせないことだと考え、近隣きんりんのグループホーム職員しやくいんに声をかけ、頻繁ひんぱんに訪問ほうもんするところからはじめました。

外出がいしゅつの希望きぼうは多く、病院びやういんでの薬くすりの処方しやうり、携帯電話けいたいごわの充電ちゆうでん、眼鏡めがねの修理しゆり、薬くすりや下着類げさくぐらゐの購入かういんなど、本ほん当とうに必要なニーズでした。これらに地元ちよんの事情じじように明るあい人が対応たいおうすることができました。なかでも交通機関かうつうきかんの利用りようなど、移動いしゆつへの支援しえんはとても重要じゆうじようでした。

また、必要な外出がいしゅつ以外にも「ちよつと顔かほを見せに」訪問ほうもん話し相手あいてになったり、散髪さんぱつの要望ようぼうにポランティアで応おうじる、バザーに出す予定だだった衣類いりを無償むじやうで提供ていきするなど、コミュニケーションをとっていく中で、名前なまを覚えられるくらい関係かんけいをつくることができました。

〈避難者のニーズ〉

かわり続けるなかで、特に「お金かね」の問題もんだいは深刻しんこくだと感じました。横浜よこはま観光ガイドかんかんガイドを見せても、開口かひこう一番いちばん「いくらかかるのか」と質問しつもんされます。今「持ち合わせ」がなく、さらに今後こゝろどのくらい避難生活ひなんせいかつが続くか(その間収入かんちゅうしゆが望めない)など、見通しみとおしが全く立たたないためにお金かねを使いにくいことがわかりました。このことは買物かひばかりでなく、交通費かうつうひがかかる移動いしゆつ・外出しゅつを控ひかえざるをえない状況じきゆうにもつながっていました。

そして、避難生活ひなんせいかつでどう時間を過すごすのかも大きな課題かだいのようでした。アイロンビーズや卓球たしきゆうをして過すごしたり、ジグソーパズルは1度作つくってまた壊こわしてもう1度やっていました。実際に本人ほんじんから「早く仕事しごとがしたい」と聞くこともありました。

当初とうしよは避難生活ひなんせいかつが長期ちやうきに及およぶ可能性のうせいもあつたので、区社協くしゃきょうにも状

況を伝えて相談し、また近くの日中活動施設にも協力をお願いしました。活動ホームから「顔見知りになるきっかけ」として余暇活動へのお誘いがあったことは、嬉しい提案でした。というのも、避難生活が長引くほど日中活動を提供することが重要だからです。

もし実際に長期化していたら、お金についてや仕事(収入)、日中の活動、移動のための支援などもっと多様な支援が必要だったはずです。そしてボランティアや個人の頑張りだけではなく、自立支援法など公的なサービス利用も含め、持続的な支援体制を組む必要があると思います。

何よりも、その人たちが応接する人的なネットワークがずっと続くことが肝要で、その意味では、今回、連絡会の取り組みに多くの人が参加したことは意義が大きかったと思います。

またほとんどの課題は、障害のあるなしに関係なく被災者みんな

が抱える課題だということもわかりました。避難に関する一般的な課題に取り組むなかで、その人の障害への配慮ということが必要になるのだと理解しました。

3週間という短期間でしたが、レンタカーを借りて「ズーラシア」に行ったことなど、少しは横浜らしい所も見てもらえました。

また、入居者部会で発案した取り組みとして、各ホームの入居者からふくいんの人たちへのメッセージを集め、小冊子「ぎずな」を綴りました。永田さん(さくらの家)、川崎さん(おんぶ)、牧さん(来夢)が学園を訪れ「負けないで頑張ってください」と直接手渡し、交流しました。

4月11日に皆さんいわき市に帰っていききました。現地はまだ余震が続くものの、最終的に避難していた本人たちの「帰りたい」という気持ち・意向を尊重したとのことでした。「帰れるのはうれしけれど、横浜を離れるのは淋し

い」と言ってもらえたこと——それほど良い関係を築くことができ、私たちにとつても素晴らしい体験となりました。

横浜市グループホーム連絡会入居者部会のみなさんが、ふくしまのいわきのみなさんにおうえんメッセージをくださいました。いわきのみなさんが1日もはやく元気になってくれることを、こころよりおいのりしています。よこはまのみなさん、おうえんしています。

えがおをわすれずに！

入居者



「入居者部会のみなさんからのメッセージ集」たくさんのメッセージがつづられています



いわき市のみなさんと

いわき市の 被災者の皆さん と出会って

グループホーム「あい」
二見 友子

私の住む町に被災地から避難されてきたと、連絡会からお話を頂き、自分にも出来ることがあればと思い、同じ職場の上司と避難場所にお邪魔させてもらいました。

想像していた以上に皆さん元気でしたが、一方で、話しの中で不安や不満を訴える言動が多いようでした。何よりも「仕事がしたい!」という気持ちでお仕事の話してくれた人もいました。皆さん明るく前向きだ

からこそ「今後」について敏感で、同行の支援ワーカーさんに「明日はどうするの?」「今日は何かあるの?」と質問されていた印象が強いです。

私は、援助者であるまえに一人の人間として被災者の皆さんと仲良くなりたいと思い、時間のある時には仲間と訪問し、散歩や卓球、オセロをしていっしょに過ごしました。私は避難されてきた方々と年齢が近いこともあり、友だちのように関わらせてもらいました。

最後には、当事者の方から「横浜に避難してきてよかった」「楽しい時間だった」と言ってもらえました。とても素敵な経験が出来たこと感謝しています。いわき市に帰っていったから「終わり」ではなく、これから繋がり続けていければと思います。

職員部会「震災時の対応と今後の備え」について話し合いました

グループホーム ブルーベリー 國井 一宏

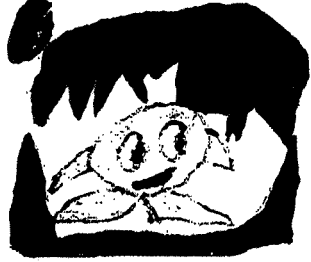
3月11日の震災時には、横浜でも震度5強の地震に見舞われ、各グループホームでは様々な混乱が起きました。電話が繋がらず安否確認が取れなかったり、交通機関がマヒして帰宅困難になったり、停電になり暖房をつけられない中、食事や入浴もままならなかったり。そういった状況に対して、各ホーム現場の中で知恵を絞りながら、なんとか対応していたのだと思います。

それまで各ホームでは緊急時の対応として、様々な備えをしてきたと思いますが、それらが役に立ったのか、立たなかったのか。そこで、グループホーム連絡会職員部会では3月11日の経験を通して、どのような対策や備えが必要だと感じたのかなど、職員同士の

意見交換の場所を作ろうと考え、「震災時の対応と今後の備えについて」話しあう会を開きました。

余震が続く、一部では計画停電も実施される中、先行きが見えない状況で入居者の生活を守らなくてはいけないと、大きな責任を感じながら、職員は懸命に対応していたと思います。肉体的にも精神的にも疲れ、悩み、不安の中といった職員もいたはず。ただの意見交換だけでなく、そういつた気持ちも少しでも軽減し、思いを分かち合えれば良いなど考えました。

当日は18名が集まりました。その中から事例をご紹介します。



アローズ 川野 祥宇(かわの よしたか)

停電の練習をして

ドリームハウス春風 大内 絵理

震災当日、金沢区は夜9時半頃まで停電になりましたが、春風の入居者は区外に通っている方が多く、当日停電を経験した入居者は1名だけでした。その後の計画停電も免れたため、停電の大変さや被災地の苦勞を考えてみよう、と停電の練習をすることにしました。

3月21日(祝)の夕方6時から8時までの間で行うことにし、事前に入居者・ご家族等に知らせ、消防設備用以外

(のブレーカーを落として)入浴や炊飯・夕食を早めに行い、懐中電灯のもとで食べる食事を体験しました。自閉症の方は、

電化製品や給湯など想像以上に使えなくなるものが多かったから、15分程度でパニックになり、自室に戻つてからも大声で独り言を話していました。途中からは充電してあったカメラが使えることを発見し、それをいじつて時間を潰したようです。他の方は、食後は歌を歌いました。「みんなと一緒だと怖くないね」「僕は2時間分けて分かってるけど、被災地はずっとだから大変だし不安だね」といった感想でした。

6月19日(日)にも2回目を行ない、一つ一つ家電のスイッチを押して、停電になったら使えなくなるもの／使えるものを確認しました。夕食の時間もずらさず、炊飯器は使わずおじやを作り、備蓄してある缶詰などを食べました。自閉症の方も実施を告知した時には少し抵抗していましたが、当日はまた新たな楽しみ方を見つけ、パニックは起こしませんでした。

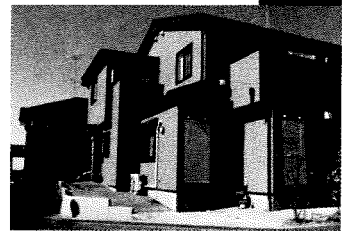
今後も練習を継続していきます。

「グループホーム 探訪」

平成23年7月9日(土)に入居者部会の役員で「ダンボ一番館」と「ダンボ二番館」を訪問しました。長い長い坂を上ると大きな公園の前に二つのホームが並んで建っています。私たちは、入居者Iさんの案内で広々としたダンボ一番館を見学させていただきました。

「ダンボ一番館」は、昭和60年11月に開設。今年で26年になるホームです。2回の移転の後、平成22年12月にこの場所に来ました。現在は5名の女性が暮らしています。「ダンボ二番館」は、平成16年3月に保土ヶ谷区仏向町で開設しました。現在5名の男性が暮らしています。開設当初からダンボで暮らしている人もいます。

平日は、地域作業所ダンボにみなさん通っています。休みの日には、地域活動ホーム夢の余暇支援を利用したり、ガイドヘルパーを使って横浜駅周辺やみなとみらい、野毛山動物園に行くそうです。作業所の行事も多く、8月には地藏盆というお祭りが行われます。また、地域のごみ拾いや、防災訓練や盆踊りにも参加



ムに残っている人もいて、訪問した日も2名の方がいました。人数の少ない時には鍋や焼き肉を一箱に食べています。音楽番組やアニメのコナンが好きなおさんは、ダンボに居て時々自宅に帰る今の暮らしをこれからも続けたいそうです。お化粧が大好きで、いつもお化粧をして作業所に通うAさんは、作業所様子をたくさん話してくれました。職員の方は、ダンボはみなさんにとって居場所になっていると話してくれました。

ダンボは、横浜市のA型グループホームとして長い歴史があります。入居者のみなさんもホームの歴史とともに穏やかに暮らしながら年を重ねてきたのだと感じられました。今度は、連絡会の行事でお会いできることを楽しみにしています。

G H スマイル 荒木 弘子

します。ダンボには、月に2回(第2、第4の週末)帰宅日があり、みなさん自宅に帰るのですが、最近はずいぶん帰れずホームに帰れずも

協力会員募集!

まちの中でくらししている障害者の姿や声をお届けする機関誌「まちの中で」を発行しつづけるためにご支援をお願いいたします。

会費 (年) 1口 2,000円
振替 …… 00280-7-73608

横浜市グループホーム連絡会

◎協力会員になっていただいた方には機関誌をお送りいたします。

基金づくりにご協力を!

グループホーム運営支援基金のために皆様のお手元で眠っている未使用のテレフォンカード・オレンジカード・ビール券・商品券などのご寄付をお願いいたします。

送り先: 横浜市グループホーム連絡会事務局
〒231-0833 横浜市中区本牧満坂10

本牧生活の家 045-623-5318

編集後記

雪景色の震災当時から連日の猛暑日が続く夏を過ぎても遅々として進まぬ復興に心痛める日々です。この東日本大震災は多くの教訓を私たちに与えてくれました。

緊急時について日ごろの備えの大切さ、「喉元過ぎれば熱さを忘れる」の諺のようにおざなりになっていなかったか反省することしきりです。今回改めて皆で話し合い考えたいと思いました。

地震・津波そして原発被害に遭われた被災地の皆さまの笑顔が一日も早く戻りますようにお祈りしています。

発行人 神奈川県身体障害者団体定期刊行物協会
横浜市港北区鳥山町 1752

横浜ラポール3F

編集人 横浜市グループホーム連絡会

横浜市中区本牧満坂 10 本牧生活の家

TEL 045 (623) 5318

FAX 045 (623) 5319

郵便振替番号 00280-7-73608

名称 横浜市グループホーム連絡会

編集責任者 室津 滋樹

定価 100円